

東京の原景観を探る ～ 現代に蘇る江戸絵図の世界*

Exploring Original Landscape of Tokyo: Revived World of Edo in Old Maps*

清水英範**・布施孝志***

By Eihan SHIMIZU **・Takashi FUSE ***

1. はじめに

歌川広重や葛飾北斎などの江戸の風景画には、地形や城の眺望を巧みに取り入れた素晴らしい都市景観が数多く描かれている。

日本橋やその境界の風景画には、江戸の賑わいとともに、江戸城、そして遥かに富士山を望む構図がよく採られたし、山の手の台地や丘陵からの風景画には、その起伏に富む地形が創り出す坂や谷地の水辺、そして遠く江戸湾を見晴らす景観が描かれた。また、下町やこれに続く郊外の風景描写には、江戸湾や隅田川、掘割運河の水地はかかせない題材であったし、その背景にはしばしば遠く富士山や筑波山が配された。

地形や城の眺望は、その都市を育む地理的環境や都市の起源、歴史を表象的に物語る。それは、他の都市には真似のできない、根源的な個性と言ってもよいものであり、都市の景観形成を考える上で大切な要素であると考える。もし、広重や北斎の描いた地形や城の眺望景観が江戸に実在したのであれば、その事実を素直に喜び、それを誇りにしたいと思う。東京という都市空間が本来もつ、景観形成上の個性や魅力を確認、再考する契機としたいし、東京の都市再生に向けて、そこから何がしかを学びたいとも思う。

しかし、広重や北斎が描いた江戸の風景画の多くは名所絵である。名所絵は、江戸の人々の物見遊山の案内図であり、また、参勤交代や旅行で江戸を訪れた人々の郷里への土産であった。そこには、江戸の繁栄ぶりや、四季の自然美が象徴的、印象的に描かれた。写実主義を貫いたとされる広重にしても、モチーフの誇張や構図のデフォルメなど、風景の情趣を高めるための絵操作を行っていたことが知られている。彼らの風景画を通して、江戸に思いを馳せることはできても、江戸の景観の実態に迫るには必然的に限界がある。

江戸の景観は、幕末期に写真に撮られたごく限られた風景や、建築史研究の成果として復原された一部の建物や局所的な街路景観を除き、その実態はほとんど分かっていない。特に、江戸の絵師たちが好んで描いた、富士山や筑波山、江戸湾、そして江戸城などを遠景・中景に据えた壮大な都市景観に至っては、これまでほとんど明らかにされていない。現代まで、その実態は大きな謎のまま放置されてきた。

この謎を解き明かしてみたい—— 私たちはこのような夢を描き、江戸の都市景観、特に地形や城の眺望景観をビジュアルに再現する研究に取り組んできた。

景観再現の方法は、天保14年(1843年)に再板刊行された天保改正御江戸大絵図(以後、天保図)を基礎資料とし、これに地形を重ね、さらに建造物を載せて、江戸という都市を立体的に表現するものである。

具体的には、①天保図の幾何補正(幾何的な歪みの補正と現代の地図座標系への位置づけ)、②明治時代の大縮尺地形図(五千分一東京区測量原図)を用いた地形データの復元と現代の広域地形データとの統合、③江戸市中や江戸城の建造物の高さを中心とした考証とモデリング、の三つの要素的研究作業から構成される。

絵図から景観を紐解くというのは、歴史地理学的な研究の常套的な接近法である。その中であって、本研究に敢えて独創性を見出すとすれば、それは、私たちの専門である地理情報学を応用した、天保図の幾何補正と地形データの処理のところに思う。天保図の幾何補正を通して、現代の地図座標系の上に江戸という空間を復元することにより、国土地理院の広域地形データを用いて富士山や筑波山、江戸湾などの遠地形の見えを正確に表現することができ、また、街路や掘割に沿った見通し景の再現にも正確性を期すことができる。

研究の全体像とこれまでの成果は、論文「江戸の都市景観の再現に関する研究」¹⁾にまとめているが、この論文は紙幅の制約もあり、景観再現の方法論の解説と再現事例の紹介を中心としたものであった。

本稿では、これを再構成し、研究の背景、問題意識を詳述するとともに、これに基づき、景観再現の結果に解釈を与えることに重きをおいて、本研究の趣旨とその成果をあらためて提示したいと思う。

* キーワーズ: 江戸、絵図、名所絵、景観再現、地理情報処理

** 正員、工博、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(東京都文京区本郷7-3-1)

TEL:03-5841-6126、E-mail:shimizu@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

*** 正員、博(工)、国土交通省国土技術政策総合研究所

2. 江戸の景観 ～ 幼少期のアルバムのごとく

江戸という都市は、景観を演出するに実に恵まれた環境にあったと思う。

関東平野の中央に位置する江戸は、京都のように名手を身近に仰ぐことはできなかったが、その分視界が開け、富士山や筑波山を眺望することができた。とりわけ、京都や大坂では得られない富士の眺望は、新興都市・江戸にとって大きな意味があったと思われる。

平野にあるとはいえ、江戸の地形はそう平坦、単純ではなかった。江戸は山の手と下町、現在の地形区分で言うところの武蔵野台地と東京低地に分けられる。

家康は、中世以来の江戸の統治者に習うように、山の手東端の台地に城を構えた。これが、天下普請によって、巨大な江戸城へと築造に築造が重ねられていった。本丸に聳え立つ五層の天守閣の威容は江戸の人々を圧倒したことであろう。天守閣は明暦の大火（明暦 3 年、1657 年）で焼失するが、それでも、高く連なる城壁とその上に立つ多数の二重、三重の櫓が江戸城を守った。下町からもしっかりと眺められたに違いない。

山の手は地質学的に古い地形であり、永年の河川浸食によって起伏に富む地形ができあがっていた。この自然地形は山の手景観に大きな影響を与えた。地形を巧みに利用した都市整備が、あるいは、地形を克服すべく行われた土木事業が、山の手独特の都市景観を造り出した。尾根や谷筋に沿って街路が引かれ、これらを結ぶように急峻な坂道が通された。山の手道、特にこうしてできた坂道は見晴らしがよく、富士見坂、潮見坂、江戸見坂などの名が残るように、眺望の名所もたくさんあった。高台や傾斜地は主に大名屋敷や寺社に当てられ、これらの敷地の緑が連なって、山の手を彩った。

谷地には、小川が溜まり、また泉が湧いて、所々に池や沼地ができていた。不忍池も赤坂の溜池も、このような水地が計画的に整備されたものである。溜池から四谷、飯田橋に続く外濠の掘削には主に谷地形が利用されたが、西から江戸城まで続く台地を南北に切り開く必要があった。また、飯田橋から隅田川に至る神田川の建設では、途中、北から突き出す台地を深く削らなければならなかった。四谷濠・真田濠の急峻な谷地形や、溪谷とも見まがう御茶ノ水の神田川の地形はこうして生まれた。このような山の手の水地や水辺、そしてこれらを望む高台は、江戸の人々にとっての行楽の地となった。

家康が江戸に入国した天正 18 年（1590 年）当時、後に下町となる地域の大半には、荒川や利根川などの本流、支流が形成した湿地帯が広がっていた。家康以降、何代かにわたって、そこに天下普請による大規模な治水、土地造成事業が行われた。先に述べた神田川の掘削もこの過程で行われた事業である。

隅田川以西に限って言うが、南から江戸城近くまで日比谷入江が入り込み、その東側には、前島と呼ばれた、北から伸びる半島状の砂州が姿を現していた^{2,3}。家康は、日比谷入江を埋め立て、前島の湿地に盛土し、江戸城から続く広大な用地を造り出した。南北に外濠を築き、江戸城直下から前島の付け根を東西に通すように大掘割運河を整備した。日本橋が架橋され、この堀割は日本橋川と呼ばれるようになる。

江戸城から外濠までは大名屋敷地が、その東側には、日本橋を中心に南北に町人地が整備された。町人地には、日本橋川の北側では中世以降の街道筋などを、また南側では前島の尾根状の微高地を利用して主要街路が通され、町割りが行われた⁴。こうして、神田から日本橋、京橋、新橋に至る大町人地が整備された。

明暦の大火を機に、江戸の過密を緩和させるべく新たな土地が必要とされた。築地の土地が造成され、隅田川に両国橋や永代橋が架橋されて、川向うにも本所や深川などの市街地が本格的に整備された。新旧の市街地には、隅田川や江戸湾から街区を分けるように大小の掘割が入り込み、いつしか水の都とも呼ばれるようになる江戸下町の都市空間が出来上がっていく。

地形が平坦な下町にあって、橋上は絶好の眺望場であった。例えば、日本橋から西を眺めれば、間近に見る河岸蔵や一石橋の先に、江戸城そして遥か富士山を一望できたと言われる。また、この日本橋からの眺望もその一つであるが、下町の幾つかの街路や掘割からは、富士山や筑波山、江戸城などの見通し景が得られたと言われている。これが何がしかの計画によるものか、自然微高地などを利用して町割りが行われたことによる偶然の結果であるのかは議論があるが⁵、いずれにせよ、江戸下町には自然地形を利用した都市整備と見通し景の形成が整合したという幸があったようである。

このように、自然地形においても、また都市整備の歴史においても、江戸は景観を演出するに格好の都市であったと思う。私たちは、この恵まれた地理的環境と歴史が創り出した江戸の景観の実際を再現してみたいと考えた。日本橋から江戸城や富士山を本当に眺望できたのだろうか。そうであれば、実際どのように見えたのだろうか。山の手を丘からは江戸市中や江戸湾をどのように見渡せたのだろうか。下町の街路や掘割からの見通し景の実際はどうであったのだろうか。このような視点から、江戸の都市景観の実態を、現代の人々の眼前にビジュアルに描き出してみたいと思ったのである。

江戸は決して東京から隔絶した都市ではない。江戸の地形は、驚くほど現在の東京に引き継がれている。小川や掘割などには埋め立て、暗渠化されたものが少なくないが、隅田川、神田川、日本橋川などは流路としては基本的に江戸時代に整備された姿を留めている。外濠も

皇居の西側については現存しているか、埋め立てられていても、四谷濠・真田濠のように江戸の地形を色濃く残しているところもある。

山の手の地形には、崖地の改良など小規模な改変は多数行われたが、起伏に富む特徴的な地形の多くは現代に受け継がれている。主要な道路網も、その多くは江戸時代のままである。土地利用は大きく変わってしまったが、大寺社はそのまま残り、また、大名屋敷や寺社を利用して造られた大規模な庭園、公園、霊園、大学など、緑豊かな空間としては今に残るものも少なくない。そして、江戸城の本丸、二の丸、三の丸の跡地は現在、皇居東御苑として市民に開かれた公園になっている。

東京には、江戸と同じく、山の手の自然地形や、天下普請によって築かれた下町の大地が広がっている。この大自然の恩恵と祖先の辛苦こそが、東京を生み育てた地理的環境であり、歴史である。波乱万丈の近代を生き抜くために、いろいろ着飾ってはきたが、東京という都市空間には江戸の面影がしっかりと残されている。江戸の都市景観は、幼少期のアルバムのごとく、東京に自らの歴史と根源的な個性を問い直す時間を与えてくれるのではないかと思うのである。

3. 謎多き江戸の景観に迫る

江戸の景観は、歌川広重（1797～1858年）や葛飾北斎（1760～1849年）の風景画を通して垣間見ることができる。江戸の後期とはいえ、広重や北斎によって浮世絵（錦絵）の世界に風景画の分野が確立されたことは、東京にとって実に幸運なことであった。東京は、彼らが描いた多数の風景画を通して、自らの過去の様相に想いを馳せることができる。彼らの風景画が美しく、魅力的であるからこそ、「江戸は景観を演出するに恵まれ都市であった」などと分かった風にも言えるのである。

広重は保永堂版「東海道五拾三次」（1833～34年）によって風景絵師としての確固たる地位を築いたが、「東都名所」、「江戸名所」などの江戸名所絵揃物を幾度となく手掛け、最晩年には名高い「名所江戸百景」（1856～58年）を描いている。広重の江戸風景画をほぼ網羅的に収録した「広重江戸風景版画大聚成」⁵⁾には、実に1500余点に及ぶ作品が紹介されている。

北斎は、風景画に傾注した時期は僅かであったとされるが、この間に代表作「富嶽三十六景」（1831～33年）を発表している。「凱風快晴（赤富士）」や「神奈川沖浪裏」などが余りにも有名なために見落とされがちであるが、「富嶽三十六景」（実際は46図）のうち18図は、江戸からの富士山の眺望景観を描いている。

しかし、広重や北斎の風景画が錦絵である以上、そこから江戸の景観の実態を探るには必然的な限界もある。

錦絵は一般大衆の購買意欲だけを頼みとする商業作品であり、喜多川歌麿の美人画や東洲斎写楽の役者絵の例を引くまでもなく、そこには実景写生の域を超えた、人々を魅了する何かが必要であった。もちろん、風景画であっても基本的には同じであったろう。

北斎の風景画は、自らの感性を顕わにするような大胆な構図と斬新な色使いで人気を博した。江戸を描いた風景画には、奇抜な構図と言えるようなものは少ないが、それでも他の絵師のものに比べれば、北斎独特の造形的芸術性を感じさせるものが多い。

写実主義を旨とした広重にしても、絵に風情を添えるための様々な絵操作を行ったであろうことは想像に難くない。大久保純一氏が指摘するように、広重には自らの写生に抛らず、名所図会の挿絵など他の風景画の図様を流用して描いたと思われる作品も少なくない⁶⁾。広重に対しても、江戸の人々が期待したのは実景の忠実な描写ではなかったのである。広重の風景画は、他の絵師に比べて相対的にリアリティが高いためであろうが、歴史研究の図像史料として用いられることも多い。しかし、広重の絵にも、そこには何がしかの虚構があることを承知しなければならない。

広重や北斎の風景画には、個性的な視点場とモチーフの選択がなされている場合もあるが、やはりその多くは名所の風景画、すなわち名所絵である。四季の名所や名立たる場所、建物の風景が繰り返し題材とされ、江戸の繁栄ぶりや自然美が象徴的、印象的に描かれた。名所絵を通して江戸の景観を探ることは、現代の東京の絵葉書でもって、後世の人々がいまの東京の景観を押し量るに等しい。江戸の名所絵から、江戸の景観を正しく理解することはできないであろうし、恐らく、過大に評価することになるであろう。彼らの名所絵に描かれることのない名も無き多くの景観も、紛れもなく江戸の景観であることを承知しなければならない。

また、広重や北斎が生きた時代は、享保・寛政の改革から続く幕政改革の一環から、出版統制が行われていた時代である。彼らの風景画は、何がしかの規制の中で刊行されたものであり、描写する風景の選択には自ずと制約があったに違いない。彼らに描かれることのない風景にも、江戸の人々が誇りとし、愛情を注いだ景観があったかもしれないし、現代の人々を唸らせるような景観が隠れ潜んでいるかもしれない。

広重や北斎を引き合いに出して述べてきたが、溪斎英泉しかり、昇亭北寿、鋏形蕙斎（北尾政美）しかりである。また、「江戸名所図会」（1834～36年）における長谷川雪旦の挿絵についても同様のことが言えよう。江戸の風景画に描かれた景観、描かれることのない景観、これらすべての江戸の景観は謎に包まれている。

本研究の主題は、この謎多き江戸の景観を再現し、そ

の実態を紐解くことにあるが、私たちがこれまで特に関心をもって取り組んできたのは、富士山や筑波山、江戸湾、そして江戸城などの眺望景観の再現である。それは、これらの景観が江戸の地理的環境や都市整備の歴史によって創り出された景観を代表するものであるからに他ならないが、加えて、これらの景観の謎を追うことに、私たちの好奇心、探究心を刺激する、より具体的な問題意識や研究の意義を見出しているからでもある。

富士山や江戸城などの眺望は、江戸の景観を象徴するものであり、風景画に欠かせない題材であった。その絵づくりには誇張や抽象など、象徴性を際立たせるための表現が行われたと考えられる。また、これらの眺望は、近景を飾る町並みや名高い寺社、橋梁などの遠景・中景に据えられることが多く、豎絵にせよ、横絵にせよ、これらを一枚の画面にうまく収めるために、实景の構図をデフォルメする必要もあったことだろう。いずれにせよ、富士山や江戸城などの風景画には、絵師の趣向、画風のようなものが現れやすく、とりわけ虚実が入り混じりやすかったのではないかと想像される。

広重と北斎がともに描いた、日本橋から江戸城と富士山を眺望する風景画を一例として紹介しておこう。図-1は広重の「江戸名所 日本橋」、図-2は北斎の「富嶽三十六景 江戸日本橋」である。両者ともに、日本橋の手前少し上方から、前景に日本橋と河岸蔵を、遠景・中景に富士山と江戸城の眺望を描いている点において共通している。これは、日本橋から西方を望む江戸の風景画の定型とも言えるものであるが、広重と北斎の描き方には特徴的な違いを見てとれる。

広重は富士山を明らかに誇張して描き、それがこの絵の大きな主題であることを伝えている。江戸（東京）から富士山を眺めると、手前の丹沢山系が富士のほぼ中腹まで覆い隠すのであるが、この絵では丹沢山系を右にずらし、富士山の見えを一層強調しているように思う。一方、北斎は江戸の繁栄、豊穡の象徴でもある河岸蔵にも同等、あるいはそれ以上の重きを置いたのであろうか、河岸蔵を眼前に迫るように大きく高く描き、その上に少し遠慮がちに富士山を描いている。

これらの結果でもあろうが、二つの絵の富士山はともに少し高く描かれ過ぎであるように思う。江戸（東京）から富士山までの直線距離は約100kmである。これだけの仰角は得られるはずがない。また、富士山の方には、河岸蔵があり、町人地、大名屋敷があり、その先には山の手の台地が続いていた。そこにも、大名屋敷があり、寺社があり、森があった。これらが富士山や丹沢山系の眺望を多少なりとも妨げていたと想像される。広重や北斎の絵のように、富士の山容を捉えることができたのか、少し疑問に思えるのである。

江戸城については、描き方がさらに極端に異なってい

る。広重は幾つもの櫓や御殿の屋根を描き、北斎は明瞭に二つの櫓だけを描いている。両者の画風からして、恐らく、広重の絵が实景に近く、北斎は何らかの意図をもって江戸城を二つ櫓で象徴化したと想像される。しかし、富士山についてそうであったように、広重は江戸城の見えについても、それを誇張して描いたと考えられなくもない。富士山であれば、現代の地図から江戸時代の眺望をある程度は想像できる。しかし、江戸城の櫓や御殿の眺望となると皆目見当もつかない。实景が想像できないのだから、広重と北斎のどちらが真景に近いのか、実際のところはっきりとしたことは何も分からない。

富士山や江戸城などの眺望景観の再現を行うことは、江戸の絵師たちの空間認識や画風、芸術性を新たな視点から解釈することにも繋がると考える。



図-1 広重「江戸名所 日本橋」（国立国会図書館）



図-2 北斎「富嶽三十六景 江戸日本橋」（山梨県立博物館所蔵）

江戸の景観を再現する研究は、風景画に描かれることのない景観の謎を紐解く作業でもある。私たちがいま特に大きな関心を寄せているのは、これから述べる、主に二つの謎に迫ることである。

第一の謎は、江戸の見通し景に関する謎である。先にも少し触れたが、江戸の下町には、幾つかの街路や堀割から富士山や筑波山、そして江戸城天守閣への見通し景

が得られたと言われている^{7,8)}。このことを客観的な分析によって初めて指摘したのは桐敷真次郎氏である。桐敷は江戸絵図（いわゆる、寛文五枚図）と明治期の地形図などを用いた分析から、**図-3**に示すような見通し景の可能性を提示した⁹⁾。これによれば、日本橋川に沿う方向には江戸城天守閣が位置し、日本橋北側の本町（通）や、**図**には明示されていないが、その南側に平行する駿河町（通）などは富士山の方向に一致していた。また、日本橋以南の通町筋（現在の中央通り、銀座通り）やその西の外濠は筑波山を見通す方角を向いていた。他にも、湯島台や愛宕山など山の手の丘に向けられた街路が幾つかあったことが分かる。

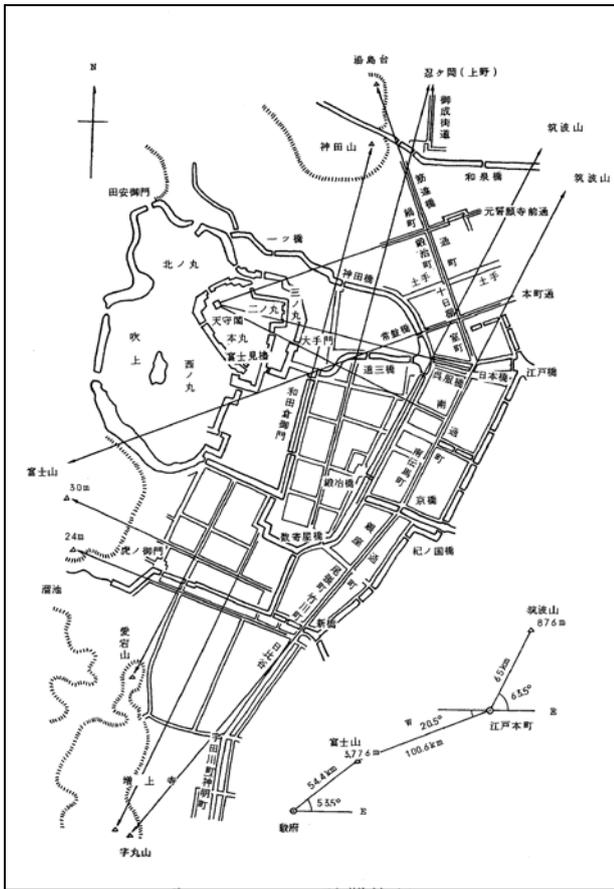


図-3 寛永・承応期江戸市街中心部構成図⁹⁾

私たちが興味を持つのは、このように可能性が示された見通し景の実際である。と言うのは、江戸の風景画に描かれた見通し景のほとんどは、駿河町からの富士山の眺望に限られているのである。天守閣（最後の寛永度天守閣）は明暦の大火で焼失し、その後は再建されていないので、描かれなかったのは当然であろう。また、山の手の丘は、下町のいろいろな場所から眺められたであろうし、その姿形にもさしたる特徴はないと思われるので、名所絵に描かれなくてもそれほど不思議ではない。

しかし、通町や外濠を通した筑波山の眺望が描かれて

いないというのはどういうことか。広重は、筑波山を背景にした風景画を「名所江戸百景」などに多数描いているのである。通町や外濠を通して筑波山を眺望できたのであれば、広重はこれを題材としたのではないか。筑波山の見通し景は本当に実在したのだろうか、江戸の景観再現を通してこの謎に迫ってみたいと思う。

ここで、駿河町からの富士山の眺望を描いた代表的な風景画を三つ紹介したい。**図-4**は雪旦の「江戸名所図会 駿河町三井呉服店」、**図-5**は広重の「名所江戸百景 する賀てふ」、**図-6**は北斎の「富嶽三十六景 江都駿河町三井見世略図」である。どれも雄大な富士の眺望を描いているが、江戸城の描写については相違がある。「江戸名所図会」では、多数の櫓からなる江戸城の姿を中景に据えているのに対し、広重と北斎の絵には、まるで江戸城を隠すかのように大きな雲（すやり霞）が置かれている。この違いをどのように理解するべきであろうか。

第二の謎は、この江戸城の眺望景観についての謎である。これまで、**図-1**、**図-2**、**図-4**と三度も、江戸城を背景にした風景画を紹介したが、実のところ、江戸城を明らかにモチーフ、あるいはその一つとしたであろう風景画は、富士山はもとより、筑波山や江戸湾、隅田川などと比べても、意外なほど少ない。「富嶽三十六景」には**図-2**の一図しかないし、「江戸名所図会」にも**図-4**の一図があるに過ぎない。広重の「名所江戸百景」においても、江戸城、特に櫓を配した姿容を明瞭に描いているものは、「日本橋雪晴」と「市中繁栄七夕祭」の二図があるくらいである。

さらに、江戸城を描いた風景画の視点場のほとんどが、日本橋やその界限に限られており、さらに、そのすべてが富士山の眺望とともに描かれているのである。江戸城の櫓や御殿は、日本橋界限以外の下町からも望めたであろうし、ましてや、山の手の大名屋敷地や寺社地、また視界の開けた坂道などからは眼のあたりに見渡せたのではないだろうか。しかし、これらの視点場からの江戸城を望む風景画は皆無と言ってよいのである。

このような現実をどのように捉えるべきだろうか。まずは、前にも述べた出版統制の影響が考えられる。市古夏生氏によれば、享保7年（1772年）に、將軍家について書かれた書物の出版は認めないという内容を含む出版統制のお触れが出され、さらに、寛政2年（1790年）にそれを確認するお触れが出されたという¹⁰⁾。江戸の風景画が隆盛するのは天保期（1830年代）以降であるが、このような出版統制が続いていた可能性は高いし、仮にそうでなくても、絵師や編者、版元側に江戸城を描写することに何がしかの自主規制的な作用が働いたとも考えられる。特に、山の手の高台から江戸城を真横に見るような（すなわち、仰ぎ見ないような）絵を描くのは不敬として憚られたのかもしれない。



図-4 雪旦「江戸名所図会 駿河町三井呉服店」¹¹⁾

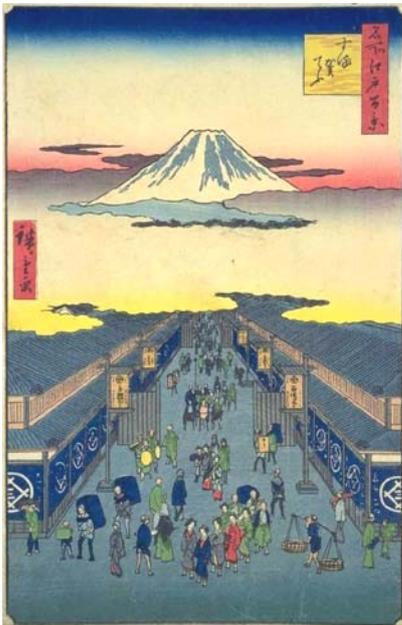


図-5 広重「名所江戸百景 する賀てふ」(国立国会図書館蔵)



図-6 北斎「富嶽三十六景 江都駿河町三井見世略図」
(山梨県立博物館蔵)

あるいは、「江戸名所図会」について千葉正樹氏が指摘する¹²⁾ように、江戸城を描かない風景画には、武家社会が町人社会から意識的にも実質的にも遠い存在となっ

たことや、江戸の都市文化の主役はもはや武士ではなく町方にあることなどのメッセージが込められていたのかもしれない。

いずれにせよ、江戸の風景画から江戸城の眺望景観を探るのは非常に困難である。江戸を象徴し、多くの人々が日常的に目にしていたに違いない江戸城の眺望は多くの謎に包まれている。私たちの研究は、この謎の解明に初めて挑むことになる。

さて、これまで江戸の風景画を通して江戸の景観、特に、富士山や筑波山、江戸城などの眺望景観を紐解くことの限界を述べてきたが、江戸の景観を理解するための視覚媒体はもちろん風景画に限らない。最後に、この点について少し言及しておきたい。

江戸の景観を知る図像史料には風景画の他にも、フェリックス・ベアトなどによって撮られた幕末・明治初期の風景写真がある¹³⁾。しかし、これらの写真の数は風景画と同様、あるいはそれ以上に限られている。また、当時の写真技術の問題から、遠景が極めて不鮮明であるという限界がある。実際、江戸(東京)から富士山や筑波山を遠望する古写真はほとんどないし、江戸城についても、櫓や門を撮影した写真は幾つかあっても、眺望写真と呼べるようなものは極めて限られている。

また、建築史研究によって復原された模型を通して、江戸の景観を理解することも可能である。江戸において比較的広域な空間を復原した例としては、波多野純氏による江戸橋広小路復原模型(国立歴史民族博物館)がある¹⁴⁾。日本橋から江戸橋に至る日本橋川南側の地域を対象とした大規模なものであり、丹念な史料調査と考証により、縮尺60分の1で復原されている。しかし、広域とはいえ、限定された地域の模型から江戸城や富士山などの遠景の実際を探るわけにはいかない。

江戸の景観を再現すること、特に、富士山や筑波山、江戸城などの眺望景観を再現することは、風景画による方法、古写真による方法、建築史的な復原による方法という従来の方法とは異なるアプローチによって成し遂げなければならない。本研究が江戸絵図を基礎資料として景観再現を目指す大きな理由はここにある。

景観再現のための具体的な方法は文献¹⁾や、これに参考文献として付した私たちの既発表論文に譲り、次章では、景観再現の事例を紹介することにしたい。

4. 景観再現結果の紹介と解釈

本章では、富士山、筑波山、江戸湾、そして江戸城が創り出した江戸の眺望景観に注目し、代表的な再現結果を紹介するとともに、これまで述べてきた研究の問題意識に従い、その解釈を行いたい。

再現結果を紹介するにあたり、幾つか補足を行ってお

く。人間の自然な視野感覚は、一般的な 35 mm フィルムカメラに例えると、水平画角にして 40 度（焦点距離 50 mm）程度と言われているが、実際は、特定の視対象への注目の度合いが高ければ画角は狭まるなど、状況によって変動する。本章で紹介する景観再現の結果は、私たちがその景観の特徴をよく表すと考えた水平画角によって表示したものである。なお、視点の高さは地上あるいは橋上から 1.5m としている。

再現結果を紹介する際には、まず、その視点の位置と視線の方向を示すことにする（以後は、適宜、視点位置と視線方向を合わせて、視点と表記する）。本来、視点は幾何補正後の天保図で示すのが正確であるが、天保図の文字や絵柄が、幾何補正のための画像処理によって歪んでいるため、ここでは、見やすさを重視して、幾何補正前の天保図を使って示すことにする。視点周辺の江戸時代の状況を知るには、幾何的な精度を若干犠牲にしても、見やすい原図を使った方がよいと考えた。

先に述べたように、本研究における江戸の景観再現には、広重や北斎などの江戸の風景画に描かれた景観の実態を探る、彼らの風景画に描かれることのなかった景観の実際に迫る、という二つ大きな視点がある。再現結果の解釈においても、このような視点を重視したい。また、風景画が残されているものについては、代表的なものを紹介し、その解釈も併せて行いたい。

江戸の風景画を最も多く残したのは、何と言っても広重であり、本章で紹介する風景画も、必然的に広重の絵が多くなる。広重画に対する解釈はこれまで数多く行われており¹⁵⁾、最近では、原信田実氏によって、「名所江戸百景」における広重の視点場やモチーフの選択の意図を、安政江戸地震（安政 2 年、1855 年）からの復興という新たな切り口から解釈しようという興味深い研究も行われている¹⁶⁾。関心のある読者は、これらの文献を参照いただきたい。風景画に対する私たちの解釈は、あくまで、遠地形や城の眺望という観点から、再現結果との比較を通して行うものである。

（1）日本橋から富士山・江戸城を望む

日本橋の橋上は視界が開け、江戸城、そして遥かに富士山を望むことができたと言われている。多くの風景画に描かれ、切絵図や図会にも、その眺望が「絶景」であったことを示唆する記述が見られる。

例えば、文久 3 年（1863 年）の尾張屋板切絵図には「此橋上ヨリ御城并富士山見エテ絶景ナリ」との記載があり¹⁷⁾、また、明和から安永期（1764～81 年）の状況を記した「東海道名所図会」には、「南に富士峩々と聳え、峰は雲間にさし入りて、かのこまだらの雪まで見え、西の方は御城巍然とし」との記述もある¹⁸⁾。

ここでは、日本橋の橋上（中央の最高部）から日本橋

川を通して西を望む景観を再現してみよう（図-7）。

ほぼ同様の視点から描いた風景画に、前章で紹介した広重の「江戸名所 日本橋」（図-1）や北斎の「富嶽三十六景 江戸日本橋」（図-2）がある。既に述べたように、広重も北斎も、日本橋の手前少し上方から、前景に日本橋と河岸蔵を、遠景・中景に富士山と江戸城の眺望を描いている。その描き方は異なるが、広重も北斎も富士山を大きく、あるいは高く描くことによって、その雄姿を印象的に表現している。一方、江戸城の描き方には両者の画風や芸術性の違いのようなものが現われているように思える。広重は、本丸御殿と見られる大御殿の屋根や多くの櫓を描いているのに対し、北斎は中央に二基の櫓を描くにとどめている。



図-7 日本橋からの眺望の視点

再現した景観を図-8 に示す。一石橋の向こうに数々の櫓が聳える江戸城の本城（本丸、二の丸）が現れた。富士見櫓、数奇屋櫓、台所前三重櫓など、本丸・二の丸に存在する実に九基の櫓を同時に眺望できた。本丸御殿の大屋根も見える。実際には、江戸城内の樹林でそのすべてが望めたわけではないであろうが、日本橋が城見の視点場として貴重な空間であったことは確かだと思う。

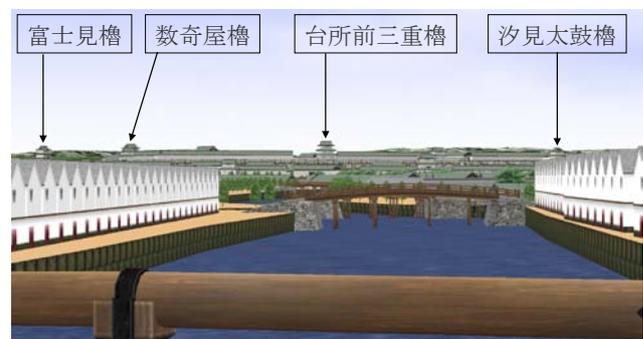


図-8 日本橋からの江戸城の眺望（画角 20 度）

広重や北斎の風景画と比べてみよう。広重の風景画は、北斎と比較して写実性が高いことが知られているが、再現結果からもそのことが伺える。北斎は実景を描写するよりも、大きな二基の櫓によって江戸城の威容を象徴的、

印象的に表現したのであろう。

さて、**図-8**には富士山が見えない。富士山を視界に入れるには、画角を広げる必要がある。画角を60度にして、富士山と江戸城を同時に視界に入れた再現景観を**図-9**に示す。広重も北斎も日本橋から眺望できた富士山と江戸城を実際の方よりも近づけ、うまく一枚の絵に収めていることが分かる。このことは、有名な「名所江戸百景 日本橋雪晴」(**図-10**)についても言える。広重は、日本橋川の屈曲の方向(**図-7** 参照)を敢えて実際とは逆に描くことによって、江戸城と富士山を縦絵の構図に違和感なく上手く収めているように思う。



図-9 日本橋からの富士山と江戸城の眺望 (画角 60度)

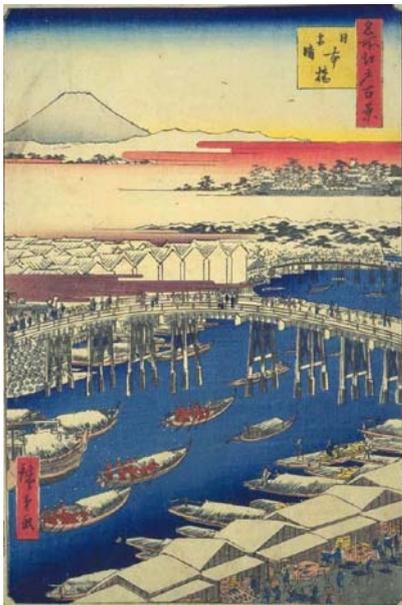


図-10 広重「名所江戸百景 日本橋雪晴」(国立国会図書館所蔵)

富士山の眺望を拡大してみよう(**図-11**)。富士山のほぼ全容が視界に入るが、その見え方は、視点場である日本橋の高さや、前景となる河岸蔵や町屋の配置・高さに大きな影響を受けることが分かるであろう。

本稿では詳述しないが、私たちは、日本橋の橋台地のせり上がり高さを、波多野純氏により復原された木橋部分の勾配から推定している。また河岸蔵の配置は、尾張

屋板切絵図などを参考に決め、その高さは、本船町河岸にあったものの図面に基づき与えている。町屋についても「熙代勝覧」に描かれた通町筋の町屋を参考に、高さを与えている。これらの配置や高さを適宜変更し、眺望可能性に関して感度分析を行うことも重要である。

最も簡単な感度分析は、視点の高さを変えての分析である。**図-11**は視点高1.5mからの眺望であるが、この高さを変えれば、富士山の見えも異なってくる。ここでは、視点高を0mから順次上げていくという簡単な実験を試みよう(**図-12**)。なお、視点高が低いと日本橋の欄干により視界が遮られるため、ここでは、日本橋の表示を省略して景観再現を行っている。

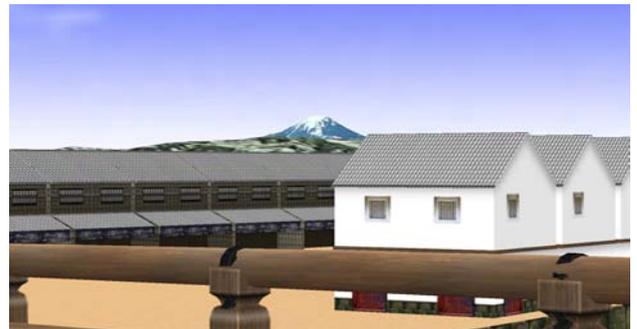


図-11 日本橋からの富士山の眺望 (画角 20度)

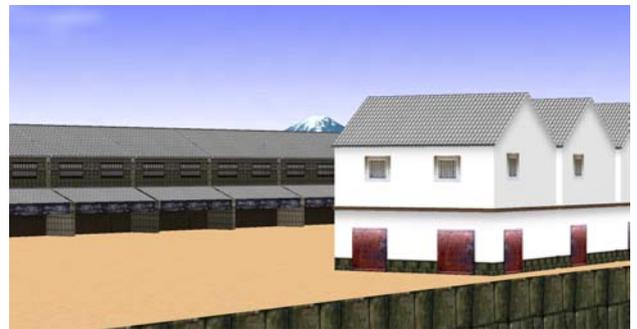


図-12 富士山の眺望に関する感度分析 (画角 20度)

上: 視点高0m、下: 視点高0.75m

視点高0m(**図-12** 上)では、富士山頂が見えるに過ぎないが、0.75mに上げると(**図-12** 下)、富士山の全容(丹沢山系に隠される部分を除く)を眺望することが

できた。したがって、前方の町屋や河岸蔵の配置と高さが正確であるという前提ではあるが、日本橋の高さに仮に0.75 m程度の過大設定があったとしても、日本橋からは富士山の全容を眺望できたことになる。また、日本橋の高さが正しいとした場合、0.75 m程度の視点高があれば、河岸蔵が仮に日本橋の袂の方まで続いていたとしても、富士の山頂部は眺望できたことが分かる。

このような粗い感度分析ではあるが、日本橋上から富士山の全容を眺望できた可能性は十分にあり、また、仮にそうでなくても、山頂部についてはほぼ間違いなく望見できたと思われる。しかし、日本橋からの富士山の眺望が真に「絶景」であったかと言えば、私たちの再現結果からは、その判断は難しいように思う。

なお、これ以降の事例紹介では感度分析の結果は示さないが、景観再現システムでは、このような感度分析を行いつつ検討を深めることを前提としている。

(2) 江戸橋から富士山・江戸城を望む

視点を日本橋の東へ移し、江戸橋の橋上（中央の最高部）から富士山と江戸城を望む景観を再現することにした。視点を図-13に示す。



図-13 江戸橋からの眺望の視点

同じような視点から描いたと思われる代表的な風景画に、広重の「江戸名所三つの眺 日本橋雪晴」（図-14）や昇亭北寿の「東都日本橋風景」（図-15）がある。両者の描く富士山の大きさに違いは見られるが、ここでも江戸城の表現の仕方に絵画としてのより特徴的な違いを見て取れる。広重は、「江戸名所 日本橋」と同様に多数の櫓や御殿の屋根を描いているのに対し、北寿は三基の櫓を大きく描いているに過ぎない。

私たちが再現した景観を図-16に示す。日本橋川は日本橋において屈折しているため、日本橋からは主に江戸城の本城を望むのに対し、江戸橋からは主に西城（西の丸、紅葉山）を望むことになる。そのため、西の丸御殿や紅葉山霊廟が視界に入るが、眺望できる櫓は富士見櫓、伏見櫓、巽三重櫓の三基に過ぎなかった。広重が描いた御殿は西の丸御殿であろうが、櫓については実際に見え

ていたであろうものより数を少し増やし、江戸城の威容を表現したものと思われる。



図-14 広重「江戸名所三つの眺 日本橋雪晴」
(国立国会図書館所蔵)



図-15 北寿「東都日本橋風景」(江戸東京博物館所蔵)

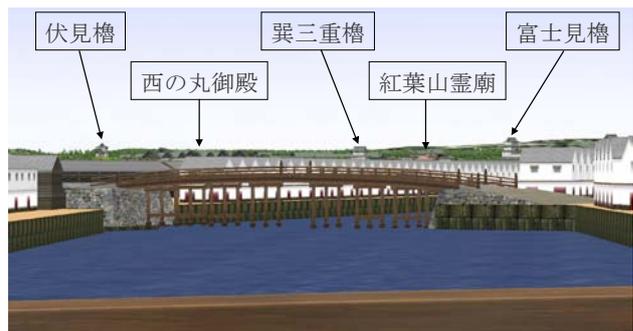


図-16 江戸橋からの江戸城の眺望 (画角 15 度)

ところで、ヘンリー・スミス氏は、北寿が描いた三基の櫓を「右の富士見櫓と左の伏見櫓、そして中央の巽三重櫓」と考察している¹⁹⁾。眺望できた櫓は、スミスの考察通りであるが、その位置は明らかに異なっている。北寿は、実際に望見できた三基の櫓をまとめて表現し、江戸城を象徴化して描いたものと思われる。

なお、江戸城については、日本橋よりも距離が遠くなることや、見える建造物が少ないということから、その

眺望は日本橋からの方が優るように思われる。

図-16 は、建造物が見やすいように画角をかなり狭くしていることもあって、富士山が見えないが、画角を広げれば富士山が視界に入ってくる。画角を 40 度にした再現結果が図-17 である。日本橋から見るよりも、日本橋川の線形によって富士山と日本橋川の方が近づき、バランスのよい構図になるように思う。

富士山の眺望を拡大したものが図-18 である。日本橋からの眺望と異なり、河岸蔵の上高く富士山を望みできる。江戸橋から富士山の全容を眺望できたことに疑いの余地はない。私たちの知る限り、江戸橋からの眺望については、日本橋からのそれと異なり、「絶景」であった等の史料記述は残されていない。しかし、再現結果を見る限り、富士山に関しては、日本橋からよりも、むしろ江戸橋からの方がよく眺望できたように思える。

城見の日本橋に対し、富士山の江戸橋——これが、私たちの印象である。日本橋を近景に、遠景・中景に富士山と江戸城を配する風景画は多いが、これらの背景は、日本橋からの江戸城の眺望、江戸橋からの富士山の眺望をうまく融合させて描かれたのではなかろうか。

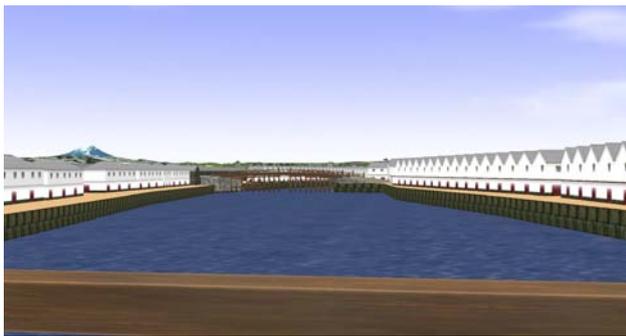


図-17 江戸橋からの富士山と江戸城の眺望 (画角 40 度)



図-18 江戸橋からの富士山の眺望 (画角 20 度)

(3) 駿河町から富士山を望む

日本橋界隈の町人地で、風景画によく描かれた場所に駿河町がある。ここでは、駿河町の通りから富士山を望む景観を再現してみよう。視点を図-19 に示す。

駿河町は、両側に三井越後屋のあった通りで、現在の

日本橋三越本店 (南側) と三井本館 (北側) の間の通りである。江戸の賑わいを象徴する三井越後屋の間に富士山を望む景観は、多くの絵師たちが題材とした。代表的な風景画に、前章で紹介した雪旦の「江戸名所図会 駿河町三井呉服店」(図-4)、広重の「名所江戸百景 する賀てふ」(図-5)、北斎の「富嶽三十六景 江都駿河町三井見世略図」(図-6)がある。



図-19 駿河町からの眺望の視点

それぞれ視点の高さは異なるが、富士山をほぼ中央に大きく描いている。富士山がよく見えたというのが、駿河町の地名の由来とも言われ、明治時代にも実際に富士山が見えたとも言われているので、江戸時代に富士山が眺望できたということに間違いはないであろう。しかし、駿河町の標高はたかだか 5 m 程度である。日本橋や江戸橋のように視点が低いわけではない。山の手の台地や大名屋敷などに眺望の一部を遮られる可能性もある。富士山は実際にどのように見えたのだろうか。

風景画には、駿河町から富士山に至る中景の描き方に特徴的な違いを見てとれる。広重と北斎は、富士山の手前に雲 (すやり霞) を描いている。これだけであれば、富士の見えを誇張するなどの美術的な技法とも考えられる。しかし、雪旦は多数の櫓からなる江戸城の雄姿を中景に据えている。駿河町から富士山を望む風景画の中に江戸城を描いているものには、他にも鳥居清長の「駿河町越後屋正月風景図」(三井記念美術館所蔵) などがある。広重も北斎も、江戸城の眺めを犠牲にしてまで雲を配したのだろうか。あるいは、江戸城を描くことに何がしかの憚りがあったのか。駿河町の先には実際にどのような景観が広がっていたのであろうか。

景観再現の結果を図-20 に示す。地形や建物に眺望を遮られることなく、ほぼ正面に富士の全容が現れた。基本的に、広重や北斎、雪旦が描いた通りである。江戸時代には、駿河町から富士山を眺望できた。しかも、その一部でなく、丹沢山系の上に屹立する富士の全貌をしっかりと望みできたのである。

さて、江戸城の見えはどうであろうか。再現した景観には、櫓や御殿など、江戸城の建造物らしきものは何も

見えない。図-21 は、視点を高くし、駿河町の先の景観を鳥瞰的に表現したものである。実は、駿河町の先には確かに江戸城があるのだが、駿河町の通りは西城の的場曲輪を通る方向にある。的場曲輪は、江戸城最南端の櫓である伏見櫓よりもさらに南に位置し、そこには、特段高い建造物はなかった。

駿河町からは富士山はよく見えたが、江戸城を象徴するようなものは見えなかった。雪旦は、鳥瞰的視野において右手に広がる江戸城を富士山の方向、すなわち中央に据えて描いたのである。広重や北斎は、駿河町からは見えない江戸城の櫓や御殿を無理に描くことはしなかった。それよりも、実際に望見できた富士の眺めをより印象的に描くことに専心したように思われる。

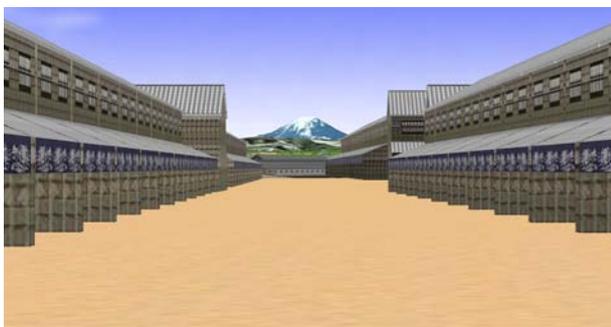


図-20 駿河町からの富士山の眺望 (画角 20 度)

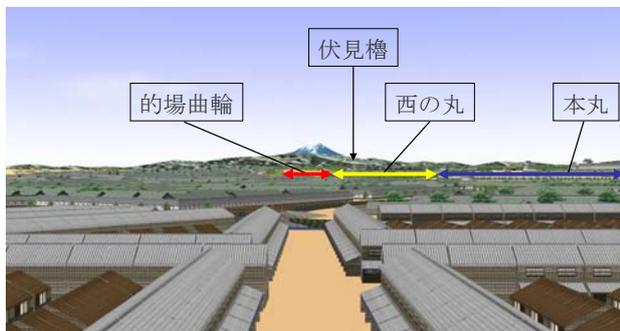


図-21 駿河町上空から富士山方向の鳥瞰図 (画角 35 度)

(4) 霞ヶ関から江戸湾を望む

ここでは、江戸の坂や丘から江戸湾を望む景観に注目し、一例として、霞ヶ関(霞ヶ関坂)から江戸湾を眺望する景観を再現してみたい(図-22)。

霞ヶ関は、中世に関所が置かれていたことに由来する地名のようだが、江戸時代にはもっぱら、今回視点とした松平安藝守(広島藩浅野家)上屋敷と松平美濃守(福岡藩黒田家)上屋敷の間の通りを指して霞ヶ関と言われていた。霞ヶ関は、西の台地(現在、国会議事堂のある永田町の丘)から東南東に緩やかに下る長い坂道であり、現在は、国土交通省や総務省の入る中央合同庁舎(北側)と外務省(南側)の間の通りになっている。



図-22 霞ヶ関からの眺望の視点

雄藩名家の上屋敷が通りを隔てて立ち並ぶ姿は江戸の名所に相応しいものであったに違いなく、霞ヶ関の景観は錦絵や泥絵に幾度となく描かれた。霞ヶ関の風景画には、モチーフを大名屋敷の威容に絞ったものも多いのであるが、広重は「名所江戸百景 霞かせき」(図-23)や「江都名所 かすみかせき」(図-24)に、霞ヶ関を通して江戸湾を見晴らす景観を描いている。



図-23 広重「名所江戸百景 霞かせき」(国立国会図書館所蔵)



図-24 広重「江都名所 かすみかせき」(国立国会図書館所蔵)

霞ヶ関の南に平行する通り（図-22 の松平美濃守上屋敷の南側）は、江戸時代、潮見坂と呼ばれた坂である。明治の地形図（五千分一東京図測量原図）を見る限り、霞ヶ関と潮見坂は地形的に特段の相違はなく、霞ヶ関も潮見の坂であったと想像される。しかし、潮見坂の名が付されたのは、坂下近くに日比谷入江が入り込んでいた頃ではなかろうか。広重の時代には、海がほとんど見えないにも関わらず、慣用的に潮見坂の名が使われていた可能性もある。

再現結果を図-25 に示そう。大名屋敷や町屋の先に江戸湾がしっかりと現れた。海の見えについては、広重が描いたよりも少し小さいが、これは明治時代の地形図から地形を復元している点を考えれば、誤差範囲のように思える。広重は、自らが見たほぼそのままに江戸湾の眺望を描いたと考えてよいように思う。霞ヶ関とその坂上、すなわち、後にわが国の政治と行政の中心となるこの土地は、潮見の名所であったのである。



図-25 霞ヶ関からの江戸湾の眺望（画角 20 度）

潮見坂からの眺望を再現してみても、図-25 とほぼ同様の江戸湾の眺望が現れた。私たちの知る限り、潮見坂から江戸湾を望む風景画はない。霞ヶ関からの景観を描けば、大名屋敷と江戸湾の眺望という、このあたりの丘や坂の景観の特徴を十分に表現できたのであろう。

なお、広重の二枚の絵（図-23、図-24）にはともに、町並みの向こう、海際左手に築地本願寺の大屋根が描かれている。霞ヶ関からの眺望の価値は、築地本願寺を眺められる点にもあったように思う。私たちは現在のところ、寺社地には江戸城紅葉山の霊廟モデルを仮置きしているため、再現景観には本願寺の大屋根は現れない。代表的な寺社地については、建造物の考証とモデリングを行う必要があり、今後の課題としたい。

（5）通町から筑波山を望む

これまで、広重などの風景画に描かれた江戸の景観の実際を探ってきた。ここからは、江戸の風景画に描かれることのなかった景観の謎に迫っていきたいと思う。

前章において、桐敷真次郎氏の研究を引いて述べたよ

うに、日本橋以南の通町やその西側の外濠は筑波山の方角を向いて通されていた。しかし、これらの場所から筑波山を望む風景画は、私たちが知る限り、一切残されていない。例えば広重は、「名所江戸百景」だけでも、「浅草川大川端宮戸川」、「柳しま」、「隅田川水神の森真崎」など 10 点近くもの作品に筑波山の眺望を描いているのだが、そのすべてが、隅田川以東を中心に江戸郊外の名所からの眺望なのである。

通町や外濠など、江戸の中心地からは筑波山を眺望できなかつたのであろうか。ここでは、通町からの筑波山の眺望可能性を探るため、京橋付近からの見通し景を再現した結果を紹介する。視点を図-26 に示す。

日本橋から筑波山までの距離は 70 km 程度であるが、筑波山の標高は 877 m（女体山山頂）に過ぎない。約 100 km 先に聳える富士山に比べ、その仰角はかなり小さい。通町から筑波山の方角には武蔵野台地以東の低地が続くため、筑波山の見えが地形に遮られる可能性はほとんどないが、日本橋以北の江戸の町並みには十分に影響を受けることになる。



図-26 通町からの眺望の視点

再現した景観を図-27 に示す。視線方向が筑波山の山頂と完全に合っていないが（視線方向は、幾何補正の微妙な誤差に影響される）、東の女体山、西の男体山から成る筑波山の山容が現れた。少なくとも、京橋から通町に沿って筑波山を一望できたのである。

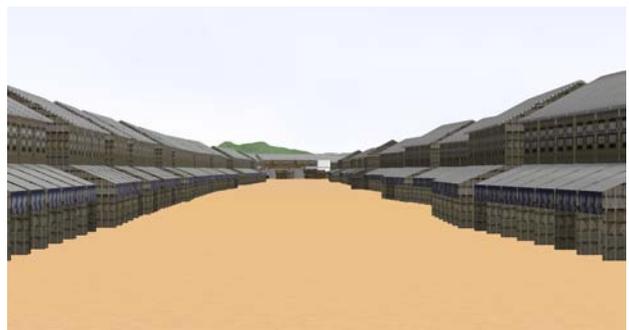


図-27 通町（京橋）からの筑波山の眺望（画角 10 度）

ちなみに、広重は京橋の名所絵を「名所江戸百景 京橋竹がし」に描いているが、それは、京橋川の北岸にあった竹河岸をモチーフとしたものであった。

なお、再現結果を見れば明らかなように、通町を日本橋方面に進めば、筑波山の見えは徐々に削られていく。私たちが分析した結果、日本橋との中間地点の少し手前のヲガ丁（大鋸町）あたりで、筑波山の眺望は日本橋以北の町並みに完全に遮られた。

（6）鍛冶橋から筑波山を望む

続いて、外濠からの筑波山の眺望可能性を探るため、鍛冶橋の橋上（中央の最高部）からの眺めを再現してみよう。視点を図-28 に示す。このあたりの外濠は戦後に埋め立てられ、現在は外堀通りになっている。



図-28 鍛冶橋からの眺望の視点

再現した景観を紹介しよう（図-29）。外濠を通して視界が開け、中央奥に見える呉服橋越しに筑波山の悠然たる姿が現れた。前節で示した通町からの眺望と異なり、江戸市中の建物にほとんど遮られることなく、筑波山の山容のほぼすべてを一望できる。ちなみに、呉服橋からでは、前方の町並みに遮蔽され筑波山は見えない。

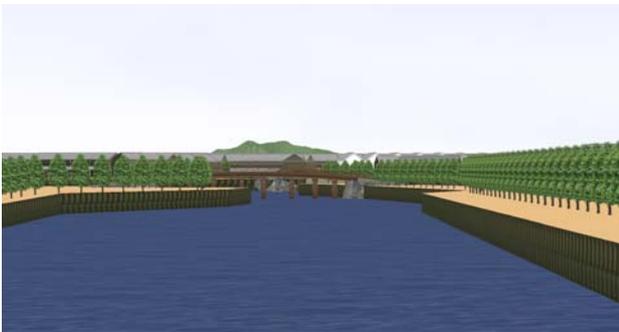


図-29 鍛冶橋からの筑波山の眺望（画角 10 度）

なお、天保図（図-28）では鍛冶橋から呉服橋間の外濠端がほぼ直線で表されているにも関わらず、再現景観にはそのようには描かれていない。実は、明治時代の地形図（五千分一東京図測量原図）を見る限り、このあ

たりの濠端は決して直線状ではなく、緩やかではあるが凹凸のある線形を示している。景観再現では、天保図の幾何補正を通して、この線形が尊重されている。緩やかな線形であるのだが、図-29 では狭い画角で再現しているために奥行感が減り、それが強調されている。

広重が筑波山の眺望を描いた「名所江戸百景 浅草川大川端宮戸川」を紹介しておきたい（図-30）。ただし、引用の便宜上、「両国船中浅草遠景」と改題された後摺を掲載している。この絵には、両国橋のあたりから隅田川を通して筑波山を望む風景が描かれている。隅田川の両国橋から上流しばらくは筑波山の方角を向いており、実際にこのように筑波山が見えていたと思われる。鍛冶橋からの再現眺望（図-29）と比べてみても、広重は筑波山を見る仰角といい、山容の表現といい、かなり実景に忠実な描写を行っていることが分かる。広重の絵の筑波山の手前に見えるのは東橋（吾妻橋）である。見通し景の中央奥に橋を、その向こうに筑波山を望む構図は、鍛冶橋からの場合と同じである。



図-30 広重「名所江戸百景 両国船中浅草遠景」
（国立国会図書館所蔵）

以上、前節からの二つの事例を通して、通町や外濠から筑波山を眺望できたことを確認した。しかも、その見えは、広重が名所絵に描いた筑波山の山容に決して引けを取るものではなく、少なくとも、名所絵の遠景を飾るに足るものであったと思われる。広重がこれらの場所からの筑波山の眺望を描かなかったのは、近景に据わるべきモチーフの不在など、筑波山の眺望とは別の理由によるところが大きかったのであろう。ただ、それにしても、江戸の中心部から筑波山の眺望を描いた風景画が一つもないというのは、どうにも不思議に思える。

(7) 日本橋界限から江戸城を望む

前章では、広重や北斎の風景画に描かれることになかった江戸の景観として、筑波山の見通し景に加え、江戸城の眺望についての謎に触れた。

江戸城の眺望は風景画にしばしば描かれたが、その数は富士山や筑波山などと比べて相対的には少なく、また、そのほとんどが富士山の眺望とともに描かれている。江戸城、特に本丸は武蔵野台地の東端にあり、いろいろな場所、方向からその姿を望みできたはずである。

私たちは、日本橋界限の街路からの江戸城の眺望可能性を検討してみた。日本橋や江戸橋からは、橋上からの眺望ということもあって視界が開けていた。しかし、街路からの眺望は、相対的に視点が低く、また日本橋川に比べてはるかに狭い空間を通して江戸城を望むことになる。江戸城を実際に眺望できたのであろうか。

対象地域は、日本橋の南北の地域で、通町筋に沿って北の今川橋から南の京橋に至る地域である。江戸城の眺望可能性は、櫓であると明確に視認できるものが最低一基あることをもって江戸城を眺望できるとした。

結果を図-31 に示す。図中、矢印の始点から終点の範囲で櫓を見ることができたことを意味する。上記(3)において、駿河町方向は江戸城・西の丸南端の的場曲輪を通り、駿河町からは櫓は見えなかったということを示した。このように、日本橋以北の街路は、江戸城の南部(主に西の丸)の方を向いており、櫓が見えた街路は少ない。ちなみに、本丁(本町)からは、かろうじて伏見櫓を望むことができた。



図-31 江戸城の櫓が視認可能な街路の範囲

これに対して、日本橋以南の街路は江戸城の主に本丸の方を向き、多数の街路から江戸城の櫓を望むことができた。その景観はどのようなものであったろうか。ここでは、ヲガ丁(大鋸町)からの眺望景観を再現してみよう。視点を図-32 に、再現結果を図-33 に示す。四基の櫓を見通す景観が現れた。左から富士見櫓、数寄屋櫓、御書院櫓、書院出櫓である。



図-32 大鋸町からの眺望の視点

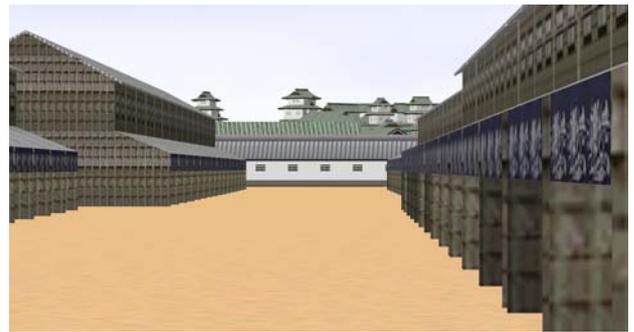


図-33 大鋸町からの江戸城の眺望(画角10度)



図-34 広重「名所江戸百景 市中繁榮七夕祭」
(国立国会図書館所蔵)

ちなみに、天保図が刊行された天保14年（1843年）当時、広重はこの大鋸町に居を構えていた。広重はこれらの櫓を間近に見て暮らしていたのである。「名所江戸百景」の中に「市中繁栄七夕祭」（図-34）があるが、この絵は、大鋸町の自宅の物干し場からの眺めを描いたものと言われている。日本橋や駿河町からの再現結果から考えて、物干し場からは西南西の方向に富士山がはっきりと見えたに違いない。また、大鋸町の通りからも櫓が見えたのであるから、物干し場からは江戸城の本丸を西北の方向に広く見渡せたことであろう。広重は富士山を中央に配し、その右に江戸城の見えるを実際よりも幾分近づけて描いている。

（8）愛宕山から江戸城を望む

続いて、江戸の台地や丘から江戸城はどのように見えたのかを検討するため、一例として、愛宕山から江戸城の方向を望む景観を取り上げる。愛宕山は武蔵野台地の東端、現在の港区北部にある標高約26mの独立した山である。山上には愛宕神社がある。

現在では小高い丘に過ぎないが、江戸時代には市中を見下ろし、また、江戸湾を見晴らすことができた江戸有数の景勝地であった。しかしながら、その眺望を描いた風景画は広重の「東都名所 芝愛宕山上見晴之図」や「名所江戸百景 芝愛宕山」など、東の江戸湾の方向を望むものに限られている。愛宕山からは北の方面にも視界が開けていたはずである。江戸城を望むことも十分できたように思われる。

愛宕山から江戸城の本丸方向を望む景観を再現してみよう。視点を図-35に、再現景観を図-36に示す。霞ヶ関周辺の大きな大名屋敷が連なり、その向こうに多数の櫓や御殿から成る江戸城が現れた。江戸城には樹木が茂っていたので、そのすべてが実際に望めたわけではないであろうが、樹々の緑を通して見る櫓や御殿の姿は、江戸城の威容を実感するに足る光景であったろう。遠く筑波山を望むこともでき、愛宕山から北を望む景観は絶景と言えるものであったと想像される。



図-35 愛宕山からの眺望の視点

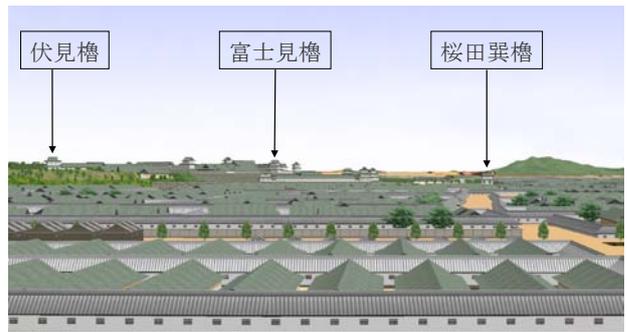


図-36 愛宕山からの江戸城の眺望（画角20度）

この壮大な景観を広重も他の絵師たちも描くことはなかった。それは何故なのであろうか。実は、現在の愛宕山の北端は鬱蒼とした樹林で覆われており、北を見渡せるような適当な場所がない。広重たちの時代にも、同じように、森が北への視界を遮っていたのだろうか。

いや、そうでは無さそうなのである。ベアトが撮影した、愛宕山から東の江戸湾の方向を望むパノラマ写真¹⁹⁾はよく知られているが、ベアトはこれだけでなく、北方を望む写真も撮っていた（図-37）。残念ながら、櫓や御殿など、江戸城と思しき建造物は写されていない。私たちの解釈では、この写真の視線は北北西にあり、西は山王神社まで、東は江戸城の吹上か、せいぜい西の丸までを撮っているように思われる。しかし、この写真の存在は、少なくとも幕末期には、愛宕山に北に視界が開けた場所があったことを示唆している。

江戸の絵師たちが愛宕山からの江戸城の眺望を描かなかった理由としては、先に述べた出版統制などの種々の規制の影響が考えられる。しかし、繰り返し述べているように、富士山の眺望との組み合わせであれば、江戸城を描いている風景画はそれなりに多いのである。出版統制といったことだけでは説明できない謎がある。



図-37 愛宕山から北方面への眺望(フェリックス・ベアト撮影)
(長崎大学附属図書館所蔵)

なお、ベアトは愛宕山から東方を望む眺望、北北西を望む眺望（図-37）を撮っているが、何故か、その間の江戸城本丸の方向を撮った写真を残していない。彼の作品には、江戸城を近くから撮影した写真が幾つかあるので、ベアトに江戸城を写すことへの遠慮があったとは思えない。一つ考えられるのは、愛宕神社は家康の命によ

り創建されたものであり、そのため、神社の側に本丸を見晴らすことへの憚りがあって、何らかの方法でその視界を遮る措置を行っていたという可能性である。このあたりの解釈は今後の課題としたいが、仮にそうだとすると、江戸市中からの江戸城の眺望地点のすべてでそのようなことが行われていたとは到底考えられない。

前節からの事例を通して言えることは、江戸市中の至るところから江戸城の眺望は得られていたに違いなく、さらに、それらの眺望は決して取るに足りないものばかりでなく、江戸を代表する景観と位置づけられても不思議でない素晴らしい景観が幾つもあった可能性がある、ということである。少なくとも、江戸城の眺望に限って言えば、風景画のみからその景観を議論することには大きな限界があると考えてよい。江戸城の眺望景観の分析には、私たちが行っているような景観再現による方法がとりわけ有効と言えよう。

(9) 日本橋から天守閣を望む

江戸城本丸の北に位置した天守閣（最後の寛永度天守閣）は、天守台とあわせ、地上 58.6 m の建造物であった。この巨大な建造物が武蔵野台地東端の標高約 20 m の土地に立っていた。愛宕山の標高が約 26 m であることを思い起こせば、江戸にあって、その高さがいかに特異なものであったかが分かるであろう。

寛永度天守閣は明暦の大火（1657 年）で焼失し、その後、江戸城に天守閣が再建されることはなかった。広重や北斎が生きた時代には天守閣は存在せず、もちろん、彼らも既になく天守閣を風景画に強引に描くことはなかった。このことを承知の上で、天保期の江戸に寛永度天守閣を再現してみることにした。江戸時代初期、人々は天守閣をどのように眺めたのであろうか、それに思いを馳せるのが目的である。

まずは、大手門の上空から俯瞰した天守閣の眺望を示す（図-38）。手前の大手三の門の奥に立つ櫓が江戸城最大級の台所前三重櫓である。天守閣が、城内にあっていかに大きな建造物であったか実感できるであろう。



図-38 大手門上空からの天守閣の眺望（画角 60 度）

江戸市中からの天守閣の眺めを検討するため、ここでは、日本橋からの眺望を再現してみよう。日本橋からの江戸城の眺望は前記（1）で再現を行っているが、その際の再現結果（図-8）と同一の視点と画角で天守閣の眺望を再現したものが図-39 である。天守閣は、広重や北斎が江戸城の象徴として描いた櫓が実に小さく見えるほどの、圧倒的な存在感を示している。

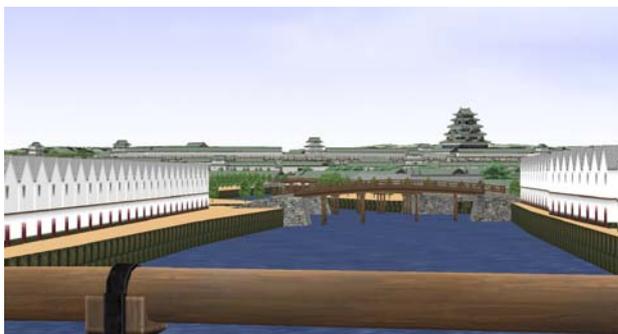


図-39 日本橋からの天守閣の眺望（画角 20 度）

視界を広げ、富士山とともに天守閣の眺望を再現してみよう。視点と画角は図-9 と同じに取る。再現結果を図-40 に示す。日本橋からの天守閣の見えの高さと大きさは富士山と匹敵する、いやそれ以上のものであった。天守閣は草創期の江戸を代表するランドマークであり、総城下町・江戸を象徴する景観を創り出していたであろうことに疑いの余地はないであろう。



図-40 日本橋からの富士山と天守閣の眺望（画角 60 度）

江戸城の最初の天守閣は、慶長 12 年（1607 年）に家康が建立した、いわゆる慶長度天守閣であるが、この天守閣は、その後の元和度天守閣（秀忠建立）、寛永度天守閣（家光建立）が建てられた場所（この二つの天守閣はほぼ同じ場所であった）よりも南の富士見多聞のあたりにあったとされる。ちなみに、慶長度天守閣を図-39、図-40 の上に再現すると、台所前三重櫓（図-39 の画面中央の櫓）の少し左手にその姿が現れる。

江戸城に存在した三代の天守閣は、そのいずれも日本橋から眺望することができたのである。ただ、これは私

たちの印象であるが、天守閣は台所前三重櫓の左に見るよりも、再現した寛永度天守閣（基本的には元和度天守閣も同じ）のように、日本橋川を通して眺める方が、より美しく、江戸城の象徴としての威厳も感じられる。江戸城の眺めとして見ても、富士山とともに望む景観として見ても、構図として優れているように思う。

元和度天守閣の造営は、本丸を北に拡張する工事に付随して秀忠が行ったものであるが、その具体的な位置は、日本橋から見通し景を得るように決められたという説がある⁷。秀忠や幕府のこのような意図を示す史料は見つかっていないと理解しているが、少なくとも、再現景観を見る限り、天守閣の北への移設により、日本橋からの眺望は景観的により良いものになったと言ってよいように思う。ただし、-39の左端に見える櫓が本丸最南端の富士見櫓であることを考えると、天守閣は本丸のどこにあっても、日本橋から眺望することはできた可能性が大きい。このことは指摘しておきたいと思う。

5. おわりに

本研究には今後の課題も少なくない。景観再現の事例を増やし、また、解釈を深化させる必要があることは言うまでもないが、それ以前の問題として、景観再現のための研究作業にも課題は多い。

例えば、本文でも述べたように、築地本願寺などのランドマーク性の高い大寺社についての考証とモデリングは重要な課題である。また、本研究では、江戸市中や江戸城内の緑地・植生の配置や種類、規模についての考証はほとんど未着手の状況にある。幕末に江戸に滞在した外国人は、富士山や江戸城の景観よりも、むしろ、田園都市とも言うべき、緑豊かな江戸の地形や町並みに驚嘆し、賛辞を送っている²⁰。江戸の都市景観を再現し、これを通して東京の潜在的な個性や魅力を探るならば、江戸の緑地・植生の表現は必要不可欠な課題である。

本研究には、このように残された課題も多く、未だ結論を言える段階ではないが、本稿を結ぶにあたり、これまでの研究を通して、私たちがいま思い、考えることを少し述べておきたいと思う。

第一に、広重や北斎が描いた江戸の景観は決して嘘ではなかった——これが私たちの素直な感想である。

もちろん、広重や北斎の風景画には、彼ら独特のモチーフの誇張や構図のデフォルメがあった。しかし彼らは、その場から見えないものを強引に描くことはなかったと考えている。広重や北斎が描いた、ほぼその通りの江戸が存在したことに、私たちは何故か新鮮な驚きと、幸福感とも言える感慨を覚えるのである。

特に、広重の写実性は想像していたよりも遥かに高かった。彼の風景画は、その視点場の景観的な特徴を読み

解く上で、十分な史料性をもつと考える。広重の絵のように、日本橋や江戸橋から富士山や江戸城の見事な眺望が得られた。駿河町からはやはり富士山を中央に望むことができたし、霞ヶ関からも遠く江戸湾を望むことができた。本稿で紹介できなかった再現事例を含め、広重が描いた通りの眺望景観が私たちの眼前に現れた。

第二に、広重や北斎が描くことのなかった江戸にも、数多くの魅力的な景観が隠れている——いま、私たちは確信を持ってこう言える。

外濠の鍛冶橋からは筑波山の全容を一望することができたし、日本橋以南の通町からも、京橋付近と範囲は限られるが筑波山を望むことができた。江戸城の櫓は、日本橋界隈の街路からも眺めることができた。愛宕山からの江戸城の眺望は、大名屋敷を前景に、筑波山を遠景に据えた壮大な景観であった。日本橋からの天守閣の眺望は誠に圧巻であった。まさしく江戸の象徴であったように思う。広重や北斎の時代に天守閣が存在したならば、「名所江戸百景」や「富嶽三十六景」の構成はまったく異なったものになったことだろう。

江戸には、まだまだ、広重や北斎の幾多の名所絵からも計り知ることのできない、現代人を驚嘆させるような素晴らしい景観が潜んでいるのではなからうか。

二章で述べたことを繰り返したい。東京は、江戸の景観の多くを変えた。しかし、江戸は決して東京から隔絶した都市ではない。起伏に富む山の手の地形、その特徴的な自然地形の多くはそのままである。先人の血の滲む努力で築かれた下町の地形は、近代の土木事業によってしっかりと守られてきた。土地利用は大きく変わってしまったが、大寺社の多くはそのまま残り、広大な大名屋敷には、庭園、霊園、大学など、緑豊かな空間として現在に残るものも少なくない。そして、江戸城本丸の土地は、皇居東御苑として市民に開かれている。

江戸の景観を再現する研究を行っている、個性的で魅力的な都市景観を形成する上で、東京という都市空間は、本来、地理的にも歴史的にも実に恵まれた大地にあることを実感させてくれる。東京には大きな可能性が残されている。世界に冠たる美しい大都会へと再生する可能性である。江戸の景観はそんな夢を与えてくれる。

謝辞

招待論文の執筆という身に余る機会をさせていただいた土木計画学研究委員会に深く感謝したい。

本研究の端緒は、清水が古地図の精度を統計的に分析する研究を行ったことにある。それが、江戸絵図の幾何補正の研究につながり、江戸の都市景観の再現研究へと発展してきた。この間、中村英夫教授、森地茂教授には、研究の位置づけから具体的な方法論に至るまで、数多くのご指導を賜った。

本研究の一部は、東京大学COEプログラム「都市空間の持続再生学の創出」の一環として行ったものである。伊藤毅教授には、合同研究会などを通して、有益なご助言を数多くいただいた。また、伊藤研究室の皆様からは、関連史料の収集などについてご協力を得た。

井上亮講師には、情報処理に関わる種々雑多なことでお世話になった。中田真人氏とは、建造物の考証やモデリングに関し、実のある共同研究を行うことができた。その他、関連研究をともに行ってきた研究室の学生諸氏にも数知れない協力を得た。また、CGの作成においては、株式会社キャドセンターのご協力を得た。

以上のように、本研究は実に多くの方々のご指導、ご協力によって成り立ったものである。ここに、深甚なる感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) 清水英範, 布施孝志, 中田真人: 江戸の都市景観の再現に関する研究, 土木学会論文集D, Vol.64, No.3, pp.473-492, 2008.
- 2) 内藤昌: 江戸と江戸城, 鹿島出版会, 1966.
- 3) 鈴木理生: 江戸の都市計画, 三省堂, 1988.
- 4) 阿部貴弘, 篠原修: 江戸における城下町中心部の都市設計, 土木学会論文集, No.632, pp.63-76, 1999.
- 5) 酒井雁高編: 広重江戸風景版画大聚成, 小学館, 1996.
- 6) 大久保純一: 広重と浮世絵風景画, 東京大学出版会, 2007.
- 7) 宮本雅明: 都市空間の近世史研究, 中央公論美術出版, 2005.
- 8) 宮本雅明: 象徴性と公共性の都市史—日本近代都市の歴史・空間・景観, 鈴木博之他編: 近代都市の成立, 東京大学出版会, 2005.
- 9) 桐敷真次郎: 天正・慶長・寛永期江戸市街地建設における景観設計, 東京都立大学都市研究報告, No.24, 1971.
- 10) 市古夏生: 〈江戸城〉 斎藤月岑他「江戸名所図会」, 国文学—解釈と教材の研究, Vo.35, No.9, 1990.
- 11) 市古夏生, 鈴木健一校訂: 新訂江戸名所図絵, ちくま学芸文庫, 1996.
- 12) 千葉正樹: 江戸城が消えていく「江戸名所図会」の到達点, 吉川弘文館, 2007.
- 13) 例えば, 横浜開港資料館編: F・ペイト写真集 外国人カメラマンが撮った幕末日本, 明石書店, 1996.
- 14) 波多野純: 復原・江戸の町, 筑摩書房, 1998.
- 15) ヘンリー・スミス: 広重 名所江戸百景, 岩波書店, 1992.
- 16) 原信田実: 謎解き広重「江戸百」, 集英社, 2007.
- 17) 金鱗堂尾張屋清七板: 八丁堀霊岸嶋 日本橋南之絵図(復刻版), 人文社.
- 18) 東京市日本橋區編: 日本橋區史 第一冊, 東京印刷, 1916.
- 19) ヘンリー・スミス編: 浮世絵にみる江戸名所, 岩波書店, 1993.
- 20) 例えば, 渡辺京二: 逝きし世の面影, 平凡社, 2005.